



談社の新註国／文学叢書所収方丈記ニ引かれたる／正親町家旧蔵本方丈記／龍門文庫現蔵／と全く一致するもの也。この龍門／文庫本はもと田中勘兵衛氏／の蔵也室町末か江戸初きの写／にしてこの本よりは古し／……」と見える。また、先掲青木氏編著も、校合本の一つに取り上げられた正親町家旧蔵本について解説する中で、

若林正治氏蔵、「于時元和三曆巳仲秋吉辰桑門老拙八十歳書之」の奥書を有する写本は漢字と仮名の相違・変体仮名の違ひ等を除けば殆ど全くこの正親町家本と一致し、むしろ正親町家本に存する衍字・脱字・脱文等がない。(三七行、主底本の「報」に対し正親町家本「哺」であるが、元和写本は流布本にしか見られぬ「味」であるのが最大の相違。他は助詞のないのが二箇所。正親町家本二七八行「蠅カウチ」に対し元和写本は「カウナ」の振仮名。一五五行正親町家本「なりける」に対し元和写本は大福光寺本と同じく「なりけり」。又正親町家本に於ては、天災地変等各条毎に改行してあるが、元和写本は改行しない。

と言及する。

高橋氏も青木氏も指摘されている通り、元和三年写本は正親町家旧蔵本と極めて近い本文を有している。そのことは、後に掲げる同本との校異でも明らかだろう。「室町末期か、少くとも慶長を降らぬ頃の書写」(新註国文学叢書『方丈記』講談社、昭23、104頁、川瀬一馬氏)とされる正親町家旧蔵本よりもいくらか年代が下るようだが、同本と非常に近い本文を有し、同本と違い書写年時が明らかな元和三年写本は、同本あるいはその周辺伝本の本文を見定めるうえで、有益なものであろう。

ただし、両本は、右両氏が波線部の如く述べられているほどには「一致」していない面も見られる。後掲校異の通り。中でも例えば、元和三年写本の第93行「侍らさりき」の場合などは、正親町家旧蔵本では「侍りき」であって、両者全く逆の意味になっている。さらに言えば、元和三年写本の上掲本文は、正親町家旧蔵本だけでなく先掲青木氏編著に取

り上げられた諸伝本および冷泉家本（冷泉家時雨亭叢書）や永青文庫本（細川家永青文庫叢刊）などにも見られないものであって、特異な本文として目を引こう。

また、青木氏は右引破線部のように述べられているが、逆に、元和三年写本の方にだけ見られる衍字や脱文も存する。例えば、次の通り（元和三年写本の本文を行番号とともに掲げ、\*以下に、正親町家旧蔵本の対応本文について注記）。

13 〱 14 しらす生れしらすしぬる人、何かたより来て、何かたへかさる \*傍線部ナシ

144 馬車力つきて \*「馬車の行ちかふ路たにもなしあやしき賤山かつも力尽て」

232 〱 233 築地ををつけり \*傍線部ナシ 267 琴おりつき琵琶 \*「おり箏つき琵琶」

以上のような本文の状況から見て、両本が大変近い関係を有することは確かだとしても、直接的関係にあるわけではなく、その間に一定程度の距離はおいているものと推察されるだろう。

(1) 京都女子大学図書館所蔵の『方丈記』伝本の全般については、拙稿「京都女子大学図書館所蔵『方丈記』伝本略目録稿 付 吉沢本（長享本）影印および「元亨」「文亀二年」本奥書写本翻刻」（拙編『東山中世文学論纂』私家版、平25）参照。

(2) 神田邦彦氏「先行研究に見る、『方丈記』の諸本とその影印・翻刻・解題一覧（稿）」（『鴨長明とその時代方丈記八〇〇年記念』（国文学研究資料館、平24）参照。

(3) 京都女子大学第十二回図書館資料特別展観「方丈記八百年記念長明と清盛―ゆく川、海へ―」（平成二十四年十一月二日〱二十二日、於京都女子学園建学記念館「錦華殿」）。同展観の図録に、元和三年写本の冒頭部分と奥書部分の写真などを掲げている。

## 【翻刻凡例】

- ・翻刻に際しては、基本的に通行の字体に改めた。また、施されている朱の区切り点を、読点として翻刻した。
- ・行送りは元のまま、行番号を五行ごとに行頭に付した。
- ・半丁ごとに、その末尾を、「」で示した。

## 【校異凡例】

- ・翻刻の下方に、正親町家旧蔵本との校異を、翻刻とできる限り上下対照し得る形で示した。
- ・正親町家旧蔵本の本文は、青木佶子氏編『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）に示されたものに拠る。
- ・行番号を掲げたうえで、元和三年写本の本文を載せ、棒線を引いた、その下に正親町家旧蔵本の対応本文を示した。
- ・特に問題ないかと思われる漢字と仮名の別や送り仮名の有無は、校異として取り上げなかった。

行川のなかれはたえずして、しかも本の水にあ

らす、よとみにうかふうたかたは、かつきえかつ

むすひて、久と、まる事なし、世の中にある

人と栖と又かくのことし、玉しきのみやこの中

5に、棟をならへいらかをあらそへる人のすまゐは、

代々をへてつきせぬ物なれば、これをたかき

いやしき人まことかとたつねぬれば、昔より

有し家はまれなり、あるひは去年やふれ

てことしつくれり、あるひは大家はほろひて

10 小家になる、すむ人もこれおなし、所も人もお

7 たつねぬれば―たつぬれば

「

ほかれと、いにしへ見し人は二三十人中にわつ

かに一人二人なり、朝に死し夕に生るゝなら

ひ、水の泡にそにたりける、しらす生れしらす

しぬる人、何かたより来て、何かたへかさるゝ、又し

15 らす、かりのやとり誰かためにか心をなやま

し、何によりてか目をよるこはしむる、其あるし

とすみかと、無常をあらそふさま、いはゝあさ

かほの露にことならず、あるひは露は落て

花はのこれり、のこるといへとも朝日にかれぬ、

20 或は花はしほみて露なをきえず、消す

といへともくれを待事なし、ものゝ心をしれ

りしより、四十余の春秋をゝくれる間に、

世のふしきを見る事やゝたひゝくになりぬ、

去安元三年四月廿八日かとよ、風はけし

25 くてしつかならさりし夜、戌の時はかりより、

都の東南より火出来て西北にいたる、は

ては朱雀門大極殿大学寮民部省ま

てうつりて、一夜のうちに塵灰となりなき、

13 生れしらす―生れ

25 戌の時―戌時

「

」

火もとは樋口、富小路とかや、病人をやとせる

30 かりやより出けるとなむ、吹まよふ風にとかく

移り行ほとに、あふきをひろけたることくす

ゑひろに成ぬ、又遠家はけふりにむせひ、ちかき

あたりはひたすら、烟をちに吹付たり、空に

灰をふきたてぬれば、火のひかりに映して、

35 あまねく紅なる中に、かせにたえすふきみたる

ほのほ、とふかことくにして、一二町をこえつ、うつ

りゆく、其中の人うつ、心あらんや、或は烟に

むせひてたふれふし、或はほのほにまくれて

忽にしぬ、或は又身ひとつからうしと。のかるれとも、

40 資財をとり出すにをよはず、七珍万宝さな

から灰燼となりనికి、其つひへいくはくぞ、この

たひ公卿の家十六やけたり、まして其外は

かそへしるすに及はず、そふして都の中三分か

一にをよへりとそ、男女死するもの、数千人馬

45 牛のたくひ辺際をしらす、人のいとなみをろか

なる中に、さしもあやうき京中の家を作る

30 出ける―出来けり

39 或は―或は或は  
からうしと。―からうして

とて、宝をつゐやし、心をなやます事はすくれ  
て、あちきなくそ侍る、又治承四年卯月十

二日の比中御門京極のほとより大なる辻

50 風おこりて、六条わたりまていかめしくふく事  
侍りき、三四町をかけてふきまぐる間、其

中にこまれる家共、大なるもちひさきも一と

してやふれさるはなし、さなからひらにたふれ

たるもあり、けたはしらはかりのこるもあり、又門

55 の上を吹はなちて四五町か外にをき、又かきを

吹払てとなりとひとつになせり、いはんや家

のうちの資財かすをつくして空にあかり、ひはた

ふきいたのたくひ冬の木の風の風にみたる、

かことし、塵を烟のこたく吹たてぬれは、すへて

60 めも見えず、おひた、しくなりとよむ音に、

ものいふこゑもきこえず、地獄の業風なり共

かはかりにこそとぞ覚えし、家の損亡するのみ

にあらず、これをとりつくるふ間に、身をそこ

なひてかたはつけるものかすもしらす、此風ひつ

65 しさるのかたにうつり行て、おほくの人のなけき

をなせり、辻風はつねにふく物なれとも、かゝる

事やある、たゝことにあらず、さるべきものゝさとし

かなとそうたかひ侍し、又治承四年みな月の

比、俄に都うつり侍りき、いとおもひの外成し

70 事也、大かた此京のはしめをきけは、嵯峨の天皇

の御とき都さたまりにけるより、のちすてに

数百歳をへたり、ことなるゆへなくてたやすく

あらたまるへくもあらねは、これを世の人やすか

らすうれへあへるさま、ことはりにも過たりされ共、

75 かくいふかひなくて御門よりはしめたてまつり

て、大臣公卿みなことくくうつり給ぬ、世につかふ

るほとの人たれかひと古京にのこりをらん、

つかさ位におもひをかけ、主君の御影を頼む

ほとの人、一日なりともとくうつらんとはけみあへり、

80 時をうしなひ世にあまされ、期する所なきも

のはうれへなからとまり、軒をあらそひし人の

住居日をへつゝ、あれ行家はこほたれてよと

68 かなゝか

77 古京―古郷

川にうかひ、地はめのまへにはたけとなる、人の  
心もあらたまりて、た、馬くらをのみおもくす、

85 牛車をもちひんとする人なし、西南海の所領

をねかひて、東北国の庄園をこのます、その時  
をのつからことのたより有て、津の国の今の

京にいたりて、所のありさまを見るに、其地ほと  
せはくて条理分るにたらず、北は山にそひて

90 高く、南はうみちかくてくたれり、なみのつねに

かまひすくしてしほ風ことにはけし、内裏は  
山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、中くさ

まかはりてゆふなるかたも侍らさりき、日々にこ  
ほち川も瀬にはこひ、くたす家はいつくに作れ

95 えるにか、なをむなしき地はおほく、つくれる家は  
すくなし、古京はすてにあらて新都はいまたな

らす、ありと有人はみな浮雲のおもひをなせり、  
もとより所における者は地をうしなひてうれふ、

100 今うつりすむ人は、土木のわつらひ有事を歎、  
道のほとを見れば、車にのるへきは馬にのり、衣

87 有て―あて 国の一―国

88 見る―みつる

90 なみの―浪のをと

91 かまひすく―かまひすしく

93 侍らさりき―侍りき

96 古京―古郷

99 有―在

冠布衣なるへきは、おほくひた、れを着たり、都  
の条理たちまちにあらたまりて、た、ひなひ

たるもの、ふにことならず、世のみたる、瑞相と

かきをけるもしるく日をへつ、世中うき立

105 て人の心もおさまらず、民のうれへつゐに

むなしからさりければ、同年の冬なを此京に

かへり給き、されとこほちわたせし家共はいか

かなりにけるにか、ことくくもとのやうにしも

つぐらす、伝聞いにしへのかしこき御代には、あはれみを

110 もつて、国をおさめたまふ、則御殿にかやをふきて

軒をたにもと、のへす、けふりのともしきを見玉ふ時は、

かきりある御調<sup>物</sup>。をさへゆるされき、これ民をめ

くみ世をたすけ玉ふによりてなり、今の世の

ありさまむかしになぞらへてしりぬへし、又養和の

115 比かとよ久なりておほえず、二年か間世中飢渴

してあさましき事侍りき、或は春夏日てり、

或は秋大風大水よからぬ事ともうちつ、き

て、五こくことくくみのらす、むなしく春田返

103 みたる、一龍る、

107 されと一されとも

112 調<sup>物</sup>。一調物

117 つ、きて一つ、き

し夏うふるいとなみのみありて、秋かり冬お

120 さむるそめきはなし、これによりて、国くくの

民あるひは家をわすれて山にすみ、地を

すて、さかひを出ぬ、さまくの御祈はしまり

て、なへてならぬ法ともを、こなはるれとも、

さらく其しるしなし、京のならひなに

125 はにつけてもみなもとは、田舎をこそたのため

るに、たえてのほるものなければ、さのみやは

操をもつくりあへん、おもひわひてさまくの

たから物、かたはしよりすつるかことくすれとも、

さらにもたつる人なし、たまかくふるものは、金

130 をかろくし粟を、もくす、乞食道のほとりに

おほく、うれへかなしむこゑ、耳にみり、前の

年かくのことくしてくれぬ、あくるとしは

たちなをるへきかとおもふほとに、あまさへ

疫病うちそひてまさるさまに跡かたなし、

135 世の人みなやみしにければ、目をへつ、きは

まり行さま、小水の魚のたとへにかなへり、は

120 そめきは―そめき

123 法ともを、―法ともを

124 さらく―更に

┌

128 ことく―ことし

131 うれへ―うかれへ

└

てには笠うちき、あし引つゝみ、よろしきすかた  
したるもの、ひたすら家ことにこひありくか

とすれは、すなはちたふれふし、又ついち

140 のつらみちのほとりにうへしぬるもの、たくひ、  
かすもしらす、とりすつるわさもしらねは、く

さきか世界にみちくゝて、かはり行かたち有

さまめもあてられぬ事おほかりき、いはんや

かはらなどには、馬車力つきて、薪さへともし

145 く成ぬれは、たのむかたなき人は、みつから家を

こほち市に出てうる、一人かもちて出ぬるあたひ、

なを一日か命にたにをよはすとそ、あやしき

事はかゝるたきゝの中に、赤丹つき、はくなんと所

ところにもゆるあひましれり、これをたつぬれは、

150 すへきかたなきものゝ、ふるき寺にいたりて仏

をぬすみ、堂の仏具をやふりとりて、わりく

たけるなりけり、濁悪の世にしも生れあひ

て、かゝる心うきわさをなん見侍りし、又いと

あはれなる事も侍りき、さりかたき夫妻な

142 有さま―在さま

144 馬車力つきて―馬車の行ちかふ路たにもなしあや

しき賤山かつも力尽て ともしく―とほしく

146 もちて―もて

151 仏具―ものゝく

155 ともちたるものは、其おもひにまさりて、ふか

155 おもひに―思ひ

きものかならずさきたちて死ぬ、其ゆへはわか

身をは、次にして、人をいたはしくおもふ間、得た

るくひものをも先かれにゆつるによりてなり、

されはおやこあるものはさたまれる事に

160 て、おやさききに立けり、又母か命つきたるを

160 さき―前 立けり―立ける

しらすして、いとけなき子の、なき乳をす

ひてふせるなどもありけり、仁和寺に隆暁

法印といふ人かくしつゝ、数もしらす死する事を

かなしみて、聖あまたかたらひて、其かうへの

165 見ゆることに額に阿字を書て縁をむす

163 死する―死ぬる

はしむるわさをなんせられける、人数をし

らんとて、四五両月をかそへたりければ、京のうち

一条よりは南、九条よりは北、京極より西、朱

雀よりは東のみちのほとりなるかうへ、すへて

170 四万二三三百あまりなむありける、況その

前後にしぬるものもおほく、又河原白川

西京諸の辺地などをくはへて、いは、際限

」

」

もあるへからす、イブン況七。道諸国にをいてをや、崇徳院

御在位の御時、長承の比とかや、かゝるためし

175 ありけりときけと、其有さまはしらす、まの

あたりいとめつらか成し事也、又おなし比かとよ、

おひた、しく大なひふること侍りき、其さまよ

のつねならず、山はくつれて川をうつみ、海は

かたふきて陸地をひたせり、土さけて水わき

180 出、いはほわれて谷にまろひ入、渚こく舟は

浪にたゝよひ、道行馬は足のたてとをまとは

せり、みやこのほとりは村々所々、堂舎塔廟一

としてまつたからす、あるひはくつれ或はたふれ、

塵灰たちのほりてさかりなるけふりのことし、地

185 のうこき家のやふるゝをとほ、いかつちのことならず、

家の中におれは、たちまちにひしけなんとす、はし

り出れは地われぬ、羽なれば空をもとふへから

す、龍ならばや雲にもものほらん、をその中にお

そるへかりけるはた。た地震なりけりところ覚え

190 待しか、かくおひた、しくふれる事、しはしにてやみ

173 イブン況七。―いかに況七道にをいて―ナシ

174 御時―御時に

175 ありけり―ありける

183 まつたからす―不全 たふれ―たふれぬ

186 家―屋

189 た。た―た、

にしかとも、其余波しはしはたえす、よのつねのお

とろく程のない、二三十度ふらぬ日はなし、十日

廿日過にしかは、四五度二三度、もしは日毎日ま

せ、二三日に一度など、大かたなこり三つきはかり

195 や侍りけん、四大種の中に、水火風は害をな

せとも、大地にいたりてはことなるへんをなさす、

むかし齋<sup>セイカウ</sup>衡の比かよ、大ないふりて、東大寺

の仏の御くしおちなと、いみしき事とも

侍りけれど、なをこのたひにはしかす、すなはち

200 皆人あちきなき事をのへて、いさゝか心のこり

もうすらきけりと見えしかとも、月日かさなり、

年こえしかは、言の葉にかけていひ出る人たにも

なし、すへて世中の有にくゝ、わか身と栖とのほか

なくあたなるさまかくのことし、いはんや所により

205 身のほとにしたかひつゝ、心をなやます事は、あ

けてかそふへからす、もしをのか身かなはずして、

権門のかたはらにおるものは、ふかくよろこぶ事

あれとも、大にたのしむにあたはず、なげきせつ

191 余波—名残 よのつね—尋常

197 齋<sup>セイカウ</sup>衡—齋衡

199 けれど—けれども しかす—しかすとそ

「

」

なる時も、声をあけてなく事なし、進退や

210 すからす、立居につけて、をそれおのゝく、たとへは、

雀のたかの巢にちかつけるかことし、もしまつ

しくて、とめる家の隣におれるものは、朝夕の

すほきすかたをはちてへつらひつゝ、出入僮

僕のうらやめるさまを見るにも、とめる家の人の、

215 なひかしろなるけしきを見るにも、心ねんく

にうこきて、時としてやすからす、もしせはき

地におれは炎上あるとき、其災をのかるゝ事なし、

もし辺地にあれは、往反のわつらひおほし、盗

賊の難はなはたし、又いきほひたる者、貪欲ふ

220 ふかく、独身なる者は人にかろしめらるゝ、たから

あれはをそれおほく、貧ければ恨切なり、

人をたのめは、身他の有となり、人をはくゝめは、

心恩愛につかはるゝ世にしたかへは身くるし、したか

はねは狂せるに似たり、いつれの所をかしめ、いかなる

225 わさをしてか、しはしも此身をやとし、玉ゆらも心

をやすむへき、わか身父かたの祖父の家をつたへ

218 往反の―往反

219 者―者は 貪欲ふふかく―貪欲ふかく

222 有―奴

224 所をか―所を

226 祖父―祖母

て、久かの所にすむ、其後縁かけ身おとろへて、

忍ふかたくしけかりしかとも、終に跡と、むる事を得ず、みそちあまりにして、さらに我心ひとつの

229 ひとつの―ひとつ

230 いほりむすふ、これを有し住居になそらふるに、

十分か一也、たゝる屋はかりをかまへて、はかく

232 築地をを―築地を

しく端屋をつくるにをよはす、わつかに築地を

をつけりといへとも、門たつるたつきなし、竹を柱

┌

235 やうからすしもあらず、所は河原近ければ水

のなむもふかく、白浪のをそれもさはかし、すへて

あらぬ世をおもひすくしつゝ、心をなやませる

事は、三十余年也、其折くゝのたかひめ、をの

238 たかひめ―たかひ目に

つからみしき運をさとりぬ、すなはちいそちの

240 春をむかへて、家を出世をそむけり、本より

妻子なければすてかたきよすかもなし、身に

官禄あらされは何につけてか執をと、めん、

242 官禄―官録 あらされは―あらず

大原山の雲にふして、又五かへりの春秋をなむ

へにける、六そちの露きえかたにをよひて、さらに

244 六そち―爰に六十

└

245 末葉のやとりをむすへる事あり、いは、旅人

の一夜のやとりをつくり、老たる蠶のまゆを

いとなむかことし、これを中比の栖となぞらふ

れは、百分か一にたにをよはず、とかくいふ程に

よはひは年く々にたかく、すみかは折く々にせはし、

250 其家のありさまよのつねならず、ひろさはわつ

かに方丈、高さは七尺かうちなり、所をさため

さるかゆへに、地をしめてつぐらす、出居をくみう

ちおほひをふきて、つきめことにかげかねをかけたたり、

若心にかなはぬ事あらは、やすく外にうつさんため

255 也、其あらためつくるるとき、いくはくのわつらひか有、

つむ所わつかに二両なり、車の力をむくふ外更に

他の用途いらす、今日野山のおくに跡をかく

して、うしろ東に三尺あまりのひさしをさして、

柴折りくふるよすかとす、南に竹のすのこを

260 しき、其にしにあかたなをつくれり、北によせて

しやうしをへたて、あみたの絵像を安置し、

そはに普賢をかけ、まへに法花経を、けり、東の

247 栖と―栖に

251 さまざま―思さため

252 出居―土居

262 まへ―そは

きはにわらひのほとろをしきつ、よるの床とす、  
西おもてに竹のつりたなをかまへて、くろきかは

265 こ三合を、けり、則和歌管弦往生要集こと

きの抄物を入たり、かたはらに箏琵琶、をのく

一ちやうをたつ、所謂琴おりつき琵琶これなり、

かりの庵の有さまかくのことし、其所のやうをいは、

南にかけひ有、岩をたて、水をためたり、林軒に

270 近ければ爪木をひろふにともしからず、名を

外山といふ、まさきのかつらあとをうつめり、谷しけ、

れと西はれたり、観念のたよりなきにしもあら

す、春は藤なみを見る、紫雲のことくにして

西方に匂ふ、夏は郭公を聞、かたらふことに

275 しての山ちをちきる、秋は日くらしの声耳

にみてり、うつせみの世をかなしふかときこゆ、

冬は雪をあはれむ、つもりきゆるさま罪

障にたとへつへし、もし念仏ものうく、読

経まめならぬ時は、みつからやすみ、みつから

280 をこたる、さまたくる人もなく、恥へき人もな

し、ことさらに無言をせされとも、ひとりお  
れは口業おさめつへし、かならず禁戒をま  
もるともなけれども、境界なれば何

につけてかやふらん、もし又あとの白浪に

285 此身をよする、朝には岡の屋に行かふ舟を

なかめて、満沙弥か風情をぬすみ、もしかつら  
の風葉をならず、くれには潯陽の江をおもひ  
やりて源都督のをこなひをならふ、余

興あれは、しはく松のひ、きに秋風の樂を

290 たくへ、水の音に流泉の曲をあやつる、芸は

これつたなけれども、人の耳をよるこはし

めんとにはあらず、ひとりしらへひとり詠して

みつから心をやしなふはかり也、又ふもとに一の柴

の庵あり、すなはち此山守かおる所也、かしこ

295 に小童あり、時々きたりあひとふらふ、若つれく

なるときはこれを友として、ゆきやうす、かれは

十歳、これは六十、よはひことの外なれとも

心をなくさむる事これおなし、あるひはつはな

281 無言を—無言

282 まもるとも—まもるとしも

296 友—朋

297 なれとも—なれと

をぬき、岩なしを取、又ぬかこをとり、芹をつむ、

299 とり—もり

300 あるひはすそわの田井にいたりて落穂を拾

て、ほくみをつくる、もし日うら、なれは、嶺に

301 うら、—うら、か

よちのほりて、はるかに古郷の空をのそみ、木

幡ふしみの里鳥羽はつかしをみる、勝地はある

303 あるし—主

しなければ、心をなくさむるにさはりなし、あゆ

305 みわつらひなく、心さしとをくいたる時は、これより

峯つ、きすみ山をこえかさとりをすきて、

「

或は岩間にまふて、あるひは石山をおかむ、又あ

はつかはらを分つ、、蟬丸のおきなかあとをと

ふらふ、田上川をわたりて、猿丸のまうちきみか

310 墓をたつねぬ、かへさにはおりにつけつ、桜をかり、

紅葉をもとめ、わらひを折、菓をひろひて、かつは

仏にたてまつり、かつは家つと、す、もし夜しつ

かなれはまとの月に故人をしのひ、猿のこゑに

袖をうるほす、草村のほたるはとをくまきの

312 家つと、す—家つとにす

313 故人—古人

315 しまのか、り火にまかひ、あかつきの雨は、をのつ

から木葉ふく嵐に似たり、山鳥のほろくとなくを

」

聞ても、父か母かとうたかひ、みねのかせきのちかくなれたるにつけても、世をとをさかる程をしる、或は埋火をかきおこして、老のね覚の友とす、

318 世を―世に

320 おそろしき山ならねは、ふくろふのこゑをあはれむに付ても、山中の景気おりに付てつくる事

なし、況ふかくおもひふかくしれらん人のためには、これにしもかきさるへからず、大かた此所に住そめしときは、あからさまとおもひしかとも、今はすてに五

」

325 とせをへたり、かりの庵ふるやとなりて軒には

326 出居―土居

朽葉ふかく、出居にはこけむせり、をのつからことこのたよりにみやこをきけは、此山にこもりゐて後、やんことなき人のかくれ玉へるもあまたきこゆ、まして其数ならぬたくひ、つくしてこれをしる

330 へからず、たひくの炎上にほろひたる家又いくそ

はくそ、たゝかりの庵のみのとけくしてをそれなし、程せはしといへとも夜ふすとこあり、昼ゐる座あり、一身をやとすに不足なし、蟬カマナはちひさきかいをこのむこれ、身をしるによりて

」

335 なり、ミサコ 雌鳩はあらいそにゐる、すなはち人を、そ

る、ゆへ也、我又かくのことし、身をしり世をしれ

れは、ねかはすたのします、た、閑なるをのそみ

とし、うれへなきをたのしみとす、すへて世の人の

栖をつくるならひ、かならずしも身のためには

340 せず、あるひは妻子眷属のためにつくり、

或は親昵朋友のためにつくる、あるひは主

君師匠、をよひ財宝馬車のためにさへ

これをつくる、我いま身のためにむすへり、人

のためにはつくらす、ゆへいかなとなれば、今の世

345 の有さま、此身のはて、ともなふへき人もなく、

たのむへきやつこもなし、たとひひろく作ると

もたれをかやとし、誰をかすへん、それ人の友た

るものは、とめるをたつとみ、ねんころなるをさ

きとす、かならずしも情あるとすなほなると

350 をは愛せず。と云事なしイ た、すへて、糸竹花月を友と

せんにはしかす、人のやつこたるものは、賞罰

はなはたしく、恩顧コあつきをさきとす、更に

335 雌鳩—雌鳩

344 ためには—ために いかんと—いかん

350 愛せず。と云事なしイ —愛せず

352 恩顧—恩顧

はこくみあはれむと、やすく静なるをは、ね

かはす、た、吾身を奴婢とするにはしかす、い

355 か、吾身をやつことするとならば、もしなすへき

事あれば則をのれか身をつかふ、たゆからずしも

あらねと、人をしたかへ、人をかへり見るよりはやす

し、もしありくへき事あれば、みつからあゆむ、

くるしといへとも馬くらうし車と心をなや

360 ますにはしかす、今一身をわかちて二の用

をなす、手のやつこ足ののり物、よく我心にかなへり、

心身のくるしみをしれ、は、くるしむ時はやすめ、ま

めなれはつかふ、つかふとてもたひくすくさす、も

のうしとても心をうこかす事なし、いかにいはんや、

365 つねにありき、常にはたらくは、これ養性なる

へし、なんそいたつらにやすみおらん、人をなやま

すは罪業也、いか、他の力をかるへき衣食のたくひ

又おなし、藤の衣麻のふすまうるにしたかひ

てはたへをかくし、野へのつはな嶺の葉、わつかに

370 命をつくはかり也、人にましはらされはすかたを

354 吾身―我身

355 吾身―我身 やつこ―奴婢

356 をのれ―をの

362 しれ、は―しれは

はつる悔もなし、かてともしければおろそかなれ  
とも味をあまくす、すへてかやうのたのしみ、と  
める人に対していふにはあらず、たゞ我身一に  
とりて、昔と今とをなすらふるはかりなり、

372 味―哺

375 それ三界はたゝこゝろ一なり、心もしやすからす

は、象馬七珍もよしなく、宮殿楼閣ものそ

みなし、今さひしきすまゐ一間の庵り、みつ

からこれを愛す、をのつからみやこに出て、身

の骨骸になれる事をおもへとも、かへりて

380 こゝにおるときは、他の俗塵に着するこ

とをあはれむ、もし人此いへる事をうたかは、

魚と鳥とのありさまを見よ、魚は水にあかす、

魚にあらされは其心をしらす、鳥は林をね

かふ、鳥にあらされは其心をしらす、閑居の

385 気味も又おなし、すますしてたれかさたらん、

抑一期の月影かたふきて、余算山のはに

ちかし、たちまちに三途のやみにむかはるとき、

何のわさをかこたんとする、仏の人ををしへ玉ふ

387 三途のやみにむかはるとき、何のわさをか―ナシ

をもむきは、ことにふれて執心なかれとなり、

390 今草庵を愛するも咎とす、閑寂に着

するもさはりなるへし、いか、用なきたのしみを

のへて、むなしきあたるときを過さん、閑なる暁、

このことはりをおもひつゝけて、みつかから心にとひ

て、いはく世をのかれて、山林にまはるは、心を

395 おさめて道を、こなはんかためなり、しかるを

なんち、すかたはひしりに似て心はにこりに

しめり、栖は則浄名居士のあとをけかせりと

いへとも、たもつ所はわつかに周梨槃特か行

にたにもをよはす、もしこれ貧賤の報のみつ

400 からなやますか、将又妄心のいたりて、狂せるか、

其とき心さらにこたふる事なし、たゝ舌根を

やとひて、不祥の阿弥陀仏両三返を申て

やみぬ、ときに建暦の二とせ、弥生のつこもりの

比、桑門の蓮胤外山のいほりにしてこれを

405 しるす

月かけはいる山の

392 むなしき―むなく

397 けかせり―けかず

402 三返―三反

はもつらかりし

たえぬ

ひかりを

見る

よしも

かな

407 つらかりし—つらかりき